

第2節 第一次施設調査

1. 第一次施設調査の目的

盲ろう者の施設利用の状況を把握する。

- ① 施設を利用している盲ろう者はいるのか。
- ② 盲ろう者はどのような施設を利用しているのか。
- ③ 施設を利用している盲ろう者は何人ぐらいいるのか。

2. 第一次施設調査の方法

(1) 調査対象

全国身体障害者更生施設の中で、視覚障害及び聴覚障害をもつ障害者が利用している施設

<施設内訳一覧>

更生施設	視覚障害者更生施設、重度身体障害者更生援護施設、聴覚・言語障害者更生施設
生活施設	身体障害者療護施設、身体障害者福祉ホーム
作業施設	身体障害者授産施設、重度身体障害者授産施設、身体障害者通所授産施設、 身体障害者福祉工場、身体障害者通所ホーム
地域利用	身体障害者福祉センター、身体障害者デイサービスセンター
施設	点字図書館、盲人ホーム、障害者更生センター、聴覚障害者情報提供施設
その他	ろうあ児施設、難聴幼児通園施設、盲児施設

(2) 調査方法

① 「全国視覚障害者更生施設の現況報告（平成10年度）」の中から、主たる障害の状況に視覚障害及び聴覚障害をもつ障害者が利用している施設を対象として、施設を利用している盲ろう者がいるかどうかを、インターネット及び電話で調査した。

② 次いで、盲ろう者の利用が確認できた施設に対し、「施設調査用紙」を用いて、当該施設の盲ろう者の受け入れ状況や盲ろう者に対する訓練などに関して電話調査を行った。

(3) 調査期間

調査期間 平成12年1月～3月末日

3. 第一次施設調査の結果および考察

(1) 第一次施設調査の結果

- 1) 「全国身体障害者更生施設の現況(平成10年度)」において、視覚障害及び聴覚障害をもつ障害者が利用している施設は、32施設だった。その内訳は、更生施設 19（視覚障害者更生施設 11、重度身体障害者更生援護施設 7、聴覚・言語障害者更生施設 1）、生活施設 4（身体障害者療護施設 4） 作業施設 6（身体障害者授産施設 1、重度身体障害者授産施設 5） 施設 3（点字図書館 2、盲人ホーム 1）であった。
- 2) その中で盲ろう者が利用している施設は、11施設だった。内訳は、更生施設 5（重度身体障害者更生援護施設 4、聴覚・言語障害者更生施設 1）、生活施設 3（身体障害者療護施設 3）、作業施設 3（身体障害者授産施設 1、重度身体障害者授産施設 2）であった。
- 3) 本調査による施設を利用している盲ろう者は、70名だった。内訳は、生活施設 34名、作業施設 21名、更生施設 15名であった。
- 4) 本調査による施設利用者70名のうち43名は、福井県の施設を利用していた。福井県内には、盲ろう者が利用している更生施設、生活施設、作業施設があった。

電話による調査対象施設と利用者数

各施設	施設種別	電話調査数	利用施設数	利用者数
更生施設	視覚障害者更生施設	11	0	0
	重度身体障害者更生援護施設	7	4	13
	聴覚・言語障害者更生施設	1	1	2
生活施設	身体障害者療護施設	4	3	34
作業施設	身体障害者授産施設	1	1	4
	重度身体障害者授産施設	5	2	17
施設	点字図書館	2	0	0
	盲人ホーム	1	0	0
	計	32	11	70

(2) 盲ろう者の実態に関する電話でのヒアリングと考察

- 1) 盲ろう者が利用している施設は、いくつかの限られた施設しかなかった。
- 2) 盲ろう重複障害者の施設入所について、対象外である施設も多かった。その理由として、視覚障害者が主に入所している施設においては、入所者とコミュニケーションが取れない、または、施設内において入所者とぶつかって危険であるなどの理由から入所受け入れ困難な場合があげられた。
- 3) 更生施設の訓練等については、視覚障害者の生活訓練メニュー（歩行訓練・日常生活訓練・コミュニケーション訓練など）であり、それ以外の訓練を実施している施設は、ほとんどなかった。
- 4) 入所している盲ろう者と十分なコミュニケーションが取れず、どんな訓練を提供したらよいか検討を重ね試行錯誤しているなどの回答もあった。
- 5) 今後は、盲ろう者が入所している施設に対して、アンケート調査を郵送または現地調査の必要性が示唆された。

第3節 第二次施設調査

1. 第二次施設調査の目的

- ① 施設を利用している盲ろう者の状況を把握する。
- ② 施設における盲ろう者への対応や訓練の状況を把握する。

2. 第二次施設調査の方法

(1) 調査対象

一次調査の結果をもとに、施設を利用している盲ろう者70名（11施設）を調査対象とした。

調査対象施設と対象者数

NO	施設名	県名	盲ろう者数	施設種別
1	光風荘	茨城県	1	重度身体障害者更生援護施設
2	ふれあいの里・どんぐり	埼玉県	9	重度身体障害者授産施設
3	リホープ	千葉県	4	重度身体障害者更生施設
4	ルミエール	千葉県	3	重度身体障害者療護施設
5	湘南希望の郷	神奈川県	2	重度身体障害者療護施設
6	ライトホープセンター	福井県	6	重度身体障害者更生施設
7	ライフトレーニングセンター	福井県	29	重度身体障害者療護施設
8	光ヶ丘ワークセンター	福井県	8	重度身体障害者授産施設
9	愛命園	広島県	2	重度身体障害者更生援護施設
10	常明園	長崎県	4	身体障害者授産施設
11	国リハ	埼玉県	2	身体障害者更生施設

(2) 調査方法

「盲ろう者の状況調査(施設利用)」のアンケート用紙を作成し、当該施設に郵送して担当者もしくは援助者に記入を依頼した。

(3) 調査項目

「障害の状況について」「コミュニケーションの方法について」「外出について」「訓練の状況について」「配慮していることや困っていることについて」「属性」など。

〈調査用紙「盲ろう者の状況調査(施設利用)」を資料として本報告書に添付〉

3. 第二次施設調査の結果

(1) 有効回答対象者数

有効回答者数は62名(89.0%)だった。未回収は7名、該当せずは1名だった。

実態調査の回答

各施設	施設種別	調査依頼数	調査回答施設数	回答対象者数	施設種別割合
更生施設	重度身体障害者更生奨励施設	4	3	9	14.5
	聴覚・言語障害者更生施設	1	1	2	3.2
生活施設	身体障害者療養施設	3	3	34	54.8
作業施設	身体障害者授産施設	1	0	0	0.0
	重度身体障害者授産施設	2	2	17	27.4
計		11	9	62	100.0

(2) 結果の集計と分析方法

調査項目からの集計表の取り扱い区分については、以下の通りとした。

1) 障害程度別の取り扱い

全盲全ろうとは、全盲(先天性)全盲(中途)全ろう(先天性)全ろう(中途)
 弱視全ろうとは、弱視(先天性)弱視(中途)全ろう(先天性)全ろう(中途)
 全盲難聴とは、全盲(先天性)全盲(中途)難聴(先天性)難聴(中途)
 弱視難聴とは、弱視(先天性)弱視(中途)難聴(先天性)難聴(中途)
 その他とは、視覚聴覚のいずれか「その他」に該当した場合を対象とした。

2) 年齢階層別・経過別の分け方は、全国盲ろう者協会で行った実態調査と同様の取り扱いとした。

3) 経過別の区分の取り扱いについては、

- * 同一年齢の場合は、ほぼ同時に目と耳に障害を受けた者とした。
- * 障害発生時期については、視覚、聴覚のいずれか不明な場合は不明とした。
- * 外出の回数については、1か月間に換算して表記した。

4) 全盲、全ろうの取り扱いの範囲を、各施設に電話で確認したところ、身体障害者手帳の等級にかかわらず日常生活の中から判断したという回答が得られた。(例えば、全盲は視機能を使って歩いていない、全ろうは会話の手段に手話や指文字を用いているなどであった。仮に身体障害者手帳が1級であっても、視機能を活用できる場合などは弱視の扱いとなった。)

(3) 調査結果と分析

1) 性別

表1-1 性別の構成

区分	男	女	計
実数	37	25	62
	(59.7)	(40.3)	(100.0)

() 内は構成比 (%)

性別別構成比においては、男性が37名(59.7%)、女性25名(40.3%)と、若干男性の示す割合が多かった。

2) 年齢

表1-2 性別の年齢構成

区分		20~39歳	40~59歳	60~79歳	わからない	計
男	実数	10	12	14	1	37
		(27.0)	(32.4)	(37.8)	(2.7)	(100.0)
女	実数	5	12	8	0	25
		(20.0)	(48.0)	(32.0)	(-)	(100.0)
計	実数	15	24	22	1	62
		(24.2)	(38.7)	(35.5)	(1.6)	(100.0)

() 内は構成比 (%)

年齢別の施設利用状況では、男性が60~70歳の14名(37.8%)、40~59歳の12名(32.4%)と全体の約7割を占めており、次いで女性は40~59歳の12名(48.0%)、60~79歳の8名(32.0%)と全体の8割を占めていた。

3) 男女別感覚機能障害の状況

表1-3 男女別感覚機能障害の状況

区 分		全盲全ろう	弱視全ろう	全盲難聴	弱視難聴	その他	計
男	実数	16 (43.2)	9 (24.3)	6 (16.2)	3 (8.1)	3 (8.1)	37 (100.0)
女	実数	11 (44.0)	6 (24.0)	4 (16.0)	2 (8.0)	2 (8.0)	25 (100.0)
計	実数	27 (43.5)	15 (24.2)	10 (16.1)	5 (8.1)	5 (8.1)	62 (100.0)

() 内は構成比 (%)

感覚機能障害別では、全盲と全ろうの障害を合わせ持つ男性が16名(43.2%)、女性11名(44.0%)と全体の43.5%を占め、次いで弱視と全ろうを合わせ持つ男性9名(24.3%)、女性6名(24.0%)となっていた。

4) 年齢階層別感覚機能障害の状況

表1-4 年齢階層別感覚機能障害の状況

区 分		全盲全ろう	弱視全ろう	全盲難聴	弱視難聴	その他	計
20~39	実数	5 (33.3)	2 (13.3)	4 (26.7)	3 (20.0)	1 (6.7)	15 (100.0)
40~59	実数	13 (54.2)	7 (29.2)	1 (4.2)	1 (4.2)	2 (8.3)	24 (100.0)
60~79	実数	9 (40.9)	5 (22.7)	5 (22.7)	1 (4.5)	2 (9.1)	22 (100.0)
不明	実数	0 (—)	1 (100.0)	0 (—)	0 (—)	0 (—)	1 (100.0)
計	計	27 (43.5)	15 (24.2)	10 (16.1)	5 (8.1)	5 (8.1)	62 (100.0)

() 内は構成比 (%)

年齢階層別機能障害では、全盲と全ろうの障害をともなう40~59歳の者が13名(54.2%)と最も高く、次いで60~79歳の9名(40.9%)であった。

5) 視覚障害の発生時期の状況

表1-5 視覚障害の発生時期の状況

区分		0 ～ 5	6 ～ 12	13 ～ 17	18 ～ 19	20 ～ 39	40 ～ 59	60 ～ 79	わから ない	計
男	実数	10 (27.0)	4 (10.8)	4 (10.8)	1 (2.7)	7 (18.9)	3 (8.1)	0 (0.0)	8 (21.6)	37 (100.0)
女	実数	6 (24.0)	1 (4.0)	2 (8.0)	0 (0.0)	8 (32.0)	1 (4.0)	0 (0.0)	7 (28.0)	25 (100.0)
計	実数	16 (25.8)	5 (8.1)	6 (9.7)	1 (1.6)	15 (24.2)	4 (6.5)	0 (0.0)	15 (24.2)	62 (100.0)

()内は構成比 (%)

視覚障害の発生時期は0～5歳の幼少時が16名(25.8%)と最も高く、次いで20～39歳の15名(24.2%)の順となっていた。また、いつ頃障害が発生したのかわからないという者も全体の1/4にあたる15名(24.2%)いた。

6) 聴覚障害の発生時期の状況

表1-6 聴覚障害の発生時期の状況

区分		0 ～ 5	6 ～ 12	13 ～ 17	18 ～ 19	20 ～ 39	40 ～ 59	60 ～ 79	わから ない	計
男	実数	22 (59.5)	1 (2.7)	3 (8.1)	0 (0.0)	3 (8.1)	1 (2.7)	0 (0.0)	7 (18.9)	37 (100.0)
女	実数	16 (64.0)	1 (4.0)	2 (8.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (8.0)	0 (0.0)	4 (16.0)	25 (100.0)
計	実数	38 (61.3)	2 (3.2)	5 (8.1)	0 (0.0)	3 (4.8)	3 (4.8)	0 (0.0)	11 (17.7)	62 (100.0)

下段は構成比 (%)

聴覚障害の発生時期については、0～5歳の幼少時で38名(61.3%)と最も高く、20歳未満に聴覚障害が発生した者が全体で72.6%と高かった。

6) -2. 人口内耳の手術を受けた該当者は0名であった。

7) 盲ろうになった時期の状況

表1-7 盲ろうになった時期の状況

区分		0 ～ 5	6 ～ 12	13 ～ 17	18 ～ 19	20 ～ 39	40 ～ 59	60 ～ 79	わから ない	計
男	実数	9 (24.3)	3 (8.1)	4 (10.8)	1 (2.7)	7 (18.9)	3 (8.1)	0 (0.0)	10 (27.0)	37 (100.0)
女	実数	3 (12.0)	1 (4.0)	2 (8.0)	0 (0.0)	8 (32.0)	3 (12.0)	0 (0.0)	8 (32.0)	25 (100.0)
計	実数	12 (19.4)	4 (6.5)	6 (9.7)	1 (1.6)	15 (24.2)	6 (9.7)	0 (0.0)	18 (29.0)	62 (100.0)

下段は構成比 (%)

表1-7は、視覚障害の発生時と聴覚障害の発生時の原票をクロスしたもので、これによると、20歳未満に盲ろう者になったものは23名(52.3%)、成人になってから盲ろうになった者は21名(47.7%)であった。一方、性別にみると、男性では20歳未満で盲ろうになっている者は半数近くの17名(45.9%)にあたり、女性では、20歳以上になってから盲ろうになった者が11名(44.0%)であった。

8) 盲ろうになった順序状況

表1-8 盲ろうになった順序状況

区 分		0	6	13	18	20	40	計
		～ 5	～ 12	～ 17	～ 19	～ 39	～ 59	
視覚と聴覚がほぼ 同時期に障害を 受けた時期	男	6	1	2	0	0	1	10 (33.8)
	女	2	0	1	0	0	0	3 (20.0)
	計	8	1	3	0	0	1	13 (29.5)
聴覚障害が発生し その後視覚障害を ともなった時期	男	3	2	1	1	5	2	14 (48.3)
	女	1	1	1	0	8	1	12 (80.2)
	計	4	3	2	1	13	3	26 (59.1)
視覚障害が発生し その後聴覚障害を ともなった時期	男	0	0	1	0	2	2	5 (17.2)
	女	0	0	0	0	0	0	0 (0.0)
	計	0	0	1	0	2	2	5 (11.4)
合 計	男	9	3	4	1	7	5	29 (65.9)
	女	3	1	2	0	8	1	15 (34.1)
	計	12 (27.3)	4 (9.1)	6 (13.6)	1 (2.3)	15 (34.1)	6 (13.6)	44 (100.0)

() 内は構成比 (%)

視覚障害の発生時と聴覚障害の発生時の原票をクロス集計したものから、盲ろう者になった経過を見ると、まず、聴覚の障害が発生した後、視覚に障害をもった者が26名(59.1%)と男女とも高かった。また、視覚と聴覚にほぼ同時期に障害が発生した者は13名(29.5%)であり、視覚に障害が発生してから聴覚に障害をもった者は5名(11.4%)であった。

9) 盲ろうに盲ろうになった経過別

表1-9 盲ろうに盲ろうになった経過

区分	幼児（0～5歳）期にほぼ同時期に視覚と聴覚障害を受けた	6歳以上になってほぼ同時期に視覚と聴覚に障害を受けた	はじめ聴覚に障害を受けその後視覚にも障害を受けた	はじめ視覚に障害を受けその後聴覚にも障害を受けた	不明	計
盲学校時代	1 (12.5)	1 (20.0)	1 (3.8)	3 (60.0)	0 (0.0)	6 (9.7)
ろう学校時代	0 (0.0)	1 (20.0)	18 (69.2)	0 (0.0)	5 (27.8)	24 (38.7)
家庭	2 (25.0)	1 (20.0)	3 (11.5)	0 (0.0)	1 (5.6)	7 (11.3)
施設	2 (25.0)	1 (20.0)	3 (11.5)	0 (0.0)	4 (22.2)	10 (16.1)
わからない	3 (37.5)	1 (20.0)	1 (3.8)	2 (40.0)	8 (44.4)	15 (24.2)
計	8 (100.0)	5 (100.0)	26 (100.0)	5 (100.0)	18 (100.0)	15 (100.0)

() 内は構成比 (%)

盲ろうとなった経過別では、初めに聴覚に障害を受け、その後、視覚にも障害を受けた者は26名であった。なかでもろう学校時代に重複の障害をもった者が多かった。

10) コミュニケーション手段をどこで獲得したのか

表1-10 コミュニケーション手段の獲得

	男	女	計
盲学校時代	4 (10.8)	2 (8.0)	6 (9.7)
ろう学校時代	15 (40.5)	9 (36.0)	24 (38.7)
家庭	6 (16.2)	1 (4.0)	7 (11.3)
施設	3 (8.1)	7 (28.0)	10 (16.1)
わからない	9 (24.3)	6 (24.0)	15 (24.2)
計	37 (100.0)	25 (100.0)	62 (100.0)

() 内は構成比 (%)

コミュニケーション手段は、ろう学校時代に獲得した者が多かった。

11) 障害の程度別コミュニケーション（発信）の方法

表1-11 障害の程度別コミュニケーション（発信）の方法

区 分	全盲・全ろう	弱視・全ろう	全盲・難聴	弱視・難聴	その他	計
音 声	4 (5.1)	2 (4.0)	7 (41.2)	2 (11.1)	3 (37.5)	18 (10.5)
指文字日本語 50音式	9 (11.4)	7 (14.0)	0 (0.0)	4 (22.2)	0 (0.0)	20 (11.6)
指文字ローマ 字式	4 (5.1)	3 (6.0)	1 (5.9)	0 (0.0)	1 (12.5)	9 (5.2)
手 話	15 (19.0)	9 (18.0)	1 (5.9)	3 (16.7)	0 (0.0)	28 (16.3)
手書き文字 (相手の掌等に書く)	18 (22.8)	8 (16.0)	1 (5.9)	3 (16.7)	1 (12.5)	31 (18.0)
指 点 字	1 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (5.6)	1 (0.0)	2 (1.2)
プリスタ	2 (2.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.2)
発音は明瞭	1 (1.3)	2 (4.0)	2 (11.8)	1 (5.6)	0 (0.0)	6 (3.5)
発音は不明瞭	8 (10.1)	6 (12.0)	1 (5.9)	0 (0.0)	2 (25.0)	17 (9.9)
筆談（点字 又は墨字）	12 (15.2)	10 (20.0)	1 (5.9)	3 (16.7)	1 (12.5)	27 (15.7)
そ の 他	5 (6.3)	3 (6.0)	3 (17.6)	1 (5.6)	0 (0.0)	12 (7.0)
計	79 (100.0)	50 (100.0)	17 (100.0)	18 (100.0)	8 (100.0)	172 (100.0)
回答者数	27	15	10	5	5	62

() 内は構成比 (%)

発信時のコミュニケーション手段としては手話、手書き文字、筆談等が中心であった。音声は難聴者に多く用いられ、手書き文字は全ろう者に多く使用されていた。指点字を用いている者は非常に少なかった。

なお、その他の回答では、喜怒哀楽の表情のみが1名、身振りが10名であった。

12) 年齢階層別コミュニケーション（発信）の方法

表1-12 年齢階層別コミュニケーション（発信）の方法

区 分	20～39	40～59	60～79	不 明	計
音 声	3 (8.3)	4 (5.7)	11 (18.0)	0 (0.0)	18 (10.5)
指文字日本語 50音式	7 (19.4)	8 (11.4)	5 (8.2)	0 (0.0)	20 (11.6)
指文字ローマ 字式	0 (0.0)	5 (7.1)	4 (6.6)	0 (0.0)	9 (5.2)
手 話	8 (22.2)	12 (17.1)	7 (11.5)	1 (33.3)	28 (16.3)
手書き文字 (相手の掌等に書く)	3 (8.3)	14 (20.0)	13 (21.3)	1 (33.3)	31 (18.0)
指 点 字	1 (2.8)	1 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.2)
プリスタ	1 (2.8)	0 (0.0)	1 (1.6)	0 (0.0)	2 (1.2)
発音は明瞭	1 (2.8)	3 (4.3)	2 (3.3)	0 (0.0)	6 (3.5)
発音は不明瞭	4 (11.1)	6 (8.6)	7 (11.5)	0 (0.0)	17 (9.9)
筆談、(点字 又は墨字)	4 (11.1)	12 (17.1)	10 (16.4)	1 (33.1)	27 (15.7)
そ の 他	4 (11.1)	5 (7.1)	1 (1.6)	0 (0.0)	12 (7.0)
計	36 (100.0)	70 (100.0)	61 (100.0)	3 (100.0)	172 (100.0)
回答者数	15	24	22	1	62

() 内は構成比 (%)

年齢別による発信時のコミュニケーション手段として、手話・指文字は年齢が低い者に多く使われていた。一方、手書き文字・筆談は、年齢の高い者によく使われていた。

13) 盲ろうになった経過別コミュニケーション（発信）の方法

表1-13 盲ろうになった経過別コミュニケーション（発信）の方法

区 分	幼児（0～5歳） 期にほぼ同時 期に視覚と 聴覚に障害を 受けた	6歳以上にな ってほぼ同時 期に視覚と聴 覚に障害を受 けた	はじめ聴覚 に障害を受 けその後、視 覚にも障害 を受けた	はじめ視覚 に障害を受 けその後、聴 覚にも障害 を受けた	不明	計
音 声	1 (6.9)	4 (19.0)	2 (2.6)	5 (45.5)	6 (13.1)	18 (10.5)
指文字日本語 50音式	0 (0.0)	1 (4.8)	13 (16.7)	0 (0.0)	6 (13.1)	20 (11.6)
指文字ローマ 字式	1 (5.9)	0 (0.0)	3 (3.8)	1 (9.1)	4 (8.9)	9 (5.2)
手 話	3 (17.6)	2 (9.2)	15 (19.2)	0 (0.0)	8 (17.8)	28 (16.3)
手書き文字 相手の掌等に書く	1 (5.9)	4 (19.0)	18 (23.1)	1 (9.1)	7 (15.6)	31 (18.0)
指 点 字	0 (0.0)	1 (4.8)	1 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.2)
プリスタ	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (1.2)
発音は明瞭	0 (0.0)	2 (9.5)	1 (1.3)	2 (18.2)	1 (2.2)	6 (3.5)
発音は不明瞭	3 (17.6)	3 (14.3)	6 (7.7)	0 (0.0)	5 (11.1)	17 (9.9)
筆談、(点字 又は墨字)	2 (11.8)	4 (19.0)	13 (16.7)	2 (18.2)	6 (13.3)	27 (15.7)
そ の 他	6 (35.3)	0 (0.0)	4 (5.1)	0 (0.0)	2 (4.4)	12 (7.0)
計	17 (100.0)	21 (100.0)	78 (100.0)	11 (100.0)	45 (100.0)	172 (100.0)
回答者数	8	5	26	5	18	62

() 内は構成比 (%)

盲ろうになった経過別の発信時のコミュニケーションとしては、「手話」「発音は不明瞭」は、幼児期に視覚と聴覚にほぼ同時期に障害を受けた者が多かった。また「音声・手書き文字・筆談」は、6歳以上になって視覚と聴覚にほぼ同時期に障害を受けた者に用いられている率が高かった。「指文字50音・手話・手書き文字・筆談」は、初め聴覚に障害を受けた後、視覚にも障害を受けた者に用いられている率が高かった。「音声・発音は明瞭・筆談」は、初めに視覚の障害を受けて、後、聴覚にも障害を受けた者に用いられている率が高かった。

14) コミュニケーション（受信）の方法

表1-14 コミュニケーション(受信)の方法

項 目	男	女	計
指点字・パーキンス・墨字	1 (0.9)	0 (0.0)	1 (0.6)
指文字・50音式に触れる	6 (5.7)	5 (6.8)	11 (6.1)
指文字・50音式を見る	3 (2.8)	2 (2.7)	5 (2.8)
指文字・ローマ字式に触れる	3 (2.8)	5 (6.8)	8 (4.5)
指文字・ローマ字式を見る	0 (0.0)	1 (1.4)	1 (0.6)
手話に触れる	10 (9.4)	10 (13.7)	20 (11.2)
手話を近くで見る	5 (4.7)	5 (6.8)	10 (5.6)
手話を遠くで見る	1 (0.9)	0 (0.0)	1 (0.6)
手書き文字を手の掌にひらがなで書く	16 (15.1)	13 (17.8)	29 (16.2)
手書き文字を手の掌にカタカナで書く	12 (11.3)	6 (8.2)	18 (10.1)
手書き文字を手の掌に漢字まじりで書く	9 (8.5)	4 (5.5)	13 (7.3)
音声・口話	6 (5.7)	6 (8.2)	12 (6.7)
筆談で点字・墨字を用紙に書く	17 (16.0)	7 (9.6)	24 (13.4)
補聴器を使用	7 (6.6)	4 (5.5)	11 (6.1)
プリスタ	4 (3.8)	0 (0.0)	4 (2.2)
その他	6 (5.7)	5 (6.8)	11 (6.1)
計	106 (100.0)	73 (100.0)	179 (100.0)

() 内は構成比 (%)

受信時の方法として多く用いられている手段は、手書き文字・手話に触れる（触読）プリスタ（点字タイプライター）、指文字・筆談等であった。

15) 障害程度別のコミュニケーション（受信）の方法

表1-15 障害程度別のコミュニケーション（受信）の方法

項 目	全盲・ 全ろう	弱視・ 全ろう	全盲・ 難聴	弱視・ 難聴	その他	計
指点字・パーキンス型	1 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.6)
指文字・50音式 を触れる	7 (9.1)	1 (2.1)	0 (0.0)	2 (7.7)	1 (11.1)	11 (6.1)
指文字・50音式 を見る	0 (0.0)	2 (4.3)	0 (0.0)	3 (11.5)	0 (0.0)	5 (2.8)
指文字・ローマ字 式を触れる	5 (6.5)	2 (4.3)	1 (5.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (4.5)
指文字・ローマ字 式見る	0 (0.0)	1 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.6)
手話に触れる	12 (15.6)	4 (8.5)	1 (5.0)	2 (7.7)	1 (11.1)	20 (11.2)
手話を近くで見る	0 (0.0)	8 (17.0)	0 (0.0)	2 (7.7)	0 (0.0)	10 (5.6)
手話を遠くで見る	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.8)	0 (0.0)	1 (0.6)
手書き文字を手の掌 にひらがなで書く	18 (23.4)	7 (14.9)	0 (0.0)	3 (11.5)	1 (11.1)	29 (16.2)
手書き文字を手の掌 にカタカナで書く	9 (7.8)	4 (8.5)	1 (5.0)	3 (11.5)	1 (11.1)	18 (10.1)
手書き文字を手の掌 に漢字まじりで書く	6 (7.8)	3 (6.4)	0 (0.0)	3 (11.5)	1 (11.1)	13 (7.3)
音声・口話	1 (1.3)	0 (0.0)	8 (40.0)	1 (3.8)	2 (22.2)	12 (6.7)
筆談で点字・墨字を用紙 に書く	7 (9.1)	11 (23.4)	1 (5.0)	4 (15.4)	1 (11.1)	24 (13.4)
補聴器を使用	3 (3.9)	0 (0.0)	6 (30.0)	1 (3.8)	1 (11.1)	11 (6.1)
プリスタ	3 (3.9)	1 (2.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (2.2)
その他	5 (6.5)	3 (6.4)	2 (10.0)	1 (3.8)	0 (0.0)	11 (6.1)

() 内は構成比 (%)

障害程度別での受信時のコミュニケーション手段は、手話・手書き文字などは全ろう者に多く使用されている。また、音声・補聴器は難聴者に多く用いられていた。

16) 年齢別のコミュニケーション（受信）の方法

表1-16 年齢別のコミュニケーション（受信）の方法

項 目	20~39	40~59	60~79	不 明	計
指点字・パーキンス型	0 (0.0)	1 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.6)
指文字・50音式 を触れる	2 (4.9)	5 (6.5)	4 (7.0)	0 (0.0)	11 (6.1)
指文字・50音式 を見る	4 (9.8)	1 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (2.8)
指文字・ローマ字 式を触れる	1 (2.4)	4 (5.2)	3 (5.3)	0 (0.0)	8 (4.5)
指文字・ローマ字 式見る	0 (0.0)	1 (1.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.6)
手話に触れる	5 (12.2)	9 (11.7)	5 (8.8)	1 (25.0)	20 (11.2)
手話を近くで見る	3 (7.3)	4 (5.2)	2 (3.5)	1 (25.0)	10 (5.6)
手話を遠くで見る	1 (2.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.6)
手書き文字を手の掌 にひらがなで書く	4 (9.8)	14 (18.2)	11 (19.3)	0 (0.0)	29 (16.2)
手書き文字を手の掌 にカタカナで書く	3 (7.3)	7 (9.1)	8 (14.0)	0 (0.0)	18 (10.1)
手書き文字を手の掌 に漢字まじりで書く	2 (4.9)	7 (9.1)	3 (5.3)	1 (25.0)	13 (7.3)
音声・口話	3 (7.3)	3 (3.9)	6 (10.5)	0 (0.0)	12 (6.1)
筆談で点字・墨字を用紙に 書く	5 (12.2)	11 (14.3)	7 (12.3)	1 (25.0)	24 (13.4)
補聴器を使用	2 (4.9)	4 (5.2)	5 (8.8)	0 (0.0)	11 (6.1)
プリスタ	1 (2.4)	1 (1.3)	2 (3.5)	0 (0.0)	4 (2.2)
その他	5 (12.2)	5 (6.5)	1 (1.8)	0 (0.0)	11 (6.1)

() 内は構成比 (%)

年齢階層別による受信時のコミュニケーション手段は、「手書き文字・筆談」は年齢の高い者に多く使われていた。

17) 盲ろう者になった経過別のコミュニケーション（受信）の方法

表1-17 盲ろう者になった経過別のコミュニケーション（受信）の方法

区 分	幼児0～5 歳期にほぼ 同時期に視 覚と聴覚に 障害を受けた	6歳以上になっ てほぼ 同時期に視 覚と聴覚に 障害を受けた	はじめに聴 覚に障害を 受けその後、 視覚にも障 害を受けた	はじめに視 覚に障害を受 けその後、 聴覚にも障 害を受けた	不明	計
指点字・パーキ ンス型	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.6)
指文字・50音 式に触れる	1 (6.7)	1 (5.9)	7 (7.8)	0 (0.0)	2 (4.4)	11 (6.1)
指文字・50音 式を見る	0 (0.0)	1 (5.9)	3 (3.3)	0 (0.0)	1 (2.2)	5 (2.8)
指文字・ローマ 字式に触れる	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (4.4)	1 (8.3)	3 (6.7)	8 (4.5)
指文字・ローマ 字式見る	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.2)	1 (0.6)
手話に触れる	3 (20.0)	0 (0.0)	11 (12.2)	0 (0.0)	6 (13.3)	20 (11.2)
手話を近くで見 る	0 (0.0)	1 (5.9)	6 (6.7)	0 (0.0)	3 (6.7)	10 (5.6)
手話を遠くで見 る	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.6)
手書き文字を手の 掌にひらがなで書く	1 (6.7)	3 (17.6)	18 (20.0)	1 (8.3)	6 (13.3)	29 (16.2)
手書き文字を手の掌 にカタカナで書く	1 (6.7)	2 (11.8)	12 (13.3)	1 (8.3)	2 (4.4)	18 (10.1)
手書き文字を手の掌 に漢字まじりで書く	1 (6.7)	1 (5.9)	9 (10.0)	0 (0.0)	2 (4.4)	13 (7.3)
音声・口話	2 (13.3)	2 (11.8)	0 (0.0)	3 (25.0)	5 (11.1)	12 (6.7)
筆談で点字・墨字を用紙 に書く	1 (6.7)	3 (17.6)	10 (11.1)	2 (16.7)	8 (17.8)	24 (13.4)
補聴器を使用	0 (0.0)	2 (11.8)	1 (1.1)	4 (33.3)	4 (8.9)	11 (6.1)
プリスタ	0 (0.0)	1 (5.9)	3 (3.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (2.2)
その他	5 (33.3)	0 (0.0)	4 (4.4)	0 (0.0)	2 (4.4)	11 (6.1)

() 内は構成比 (%)

盲ろう者になった経過別の受信時のコミュニケーション方法は、幼児期にほぼ同時期に視覚と聴覚に障害を受けた者は、「手話・その他」の手段を用いている者が多かった。6歳以上になってほぼ同時期に視覚と聴覚に障害を受けた者は「手書き文字・筆談点字・墨字を紙に書く」を用いている者が多かった。また、初めに聴覚に障害を受けその後、視覚

に障害を受けた者については「手話に触れる・手書き文字・筆談」が多かった。一方、初めに視覚に障害を受け、その後、聴覚に障害を受けた者については、「音声・口話・筆談点字・墨字を紙に書く等」の手段を用いていた。

さらに、現在盲ろう者が一番多く使用しているコミュニケーション手段としては、「手書き文字」「筆談（点字・墨字）」があげられた。

なお、その他については、身振り11名であった。

18) 外出はどうしていますか

表1-18 外出状況

		外出はほとんど一人で出来る	慣れた場所であれば一人で出来る	日中なら一人で出来る	外出はいつも誰かと一緒である	計
男	実数	1 (2.7)	3 (8.1)	0 (0.0)	33 (89.2)	37 (100.0)
女	実数	1 (4.0)	1 (4.0)	0 (0.0)	23 (92.0)	25 (100.0)
計	実数	2 (3.2)	4 (6.5)	0 (0.0)	56 (90.3)	62 (100.0)

()内は構成比(%)

外出に関しては9割近くの者が、誰かの介助のもとに行動していた。

19) 外出の頻度について（1か月間）

表1-19 外出の頻度

		1回以下	2回～3回	4回～5回	6回以上	計
男	実数	14 (37.8)	13 (35.1)	3 (8.1)	7 (18.9)	37 (100.0)
女	実数	10 (40.0)	9 (36.0)	5 (20.0)	1 (4.0)	25 (100.0)
計	実数	24 (38.7)	22 (35.5)	8 (12.9)	8 (12.9)	62 (100.0)

()内は構成比(%)

外出の頻度をみると、1ヶ月のうち1回以下の者は24名(38.7%)、2～3回の者は22名(35.5%)と多かった。両者をあわせると、1ヶ月に外出が3回以下の者は46名(74.2%)であった。

20) 障害程度別の外出の頻度について（1か月間）

表1-20 障害程度別の外出の頻度

		1回以下	2回～3回	4回～5回	6回以上	計
全盲 全ろう	実数	10 (37.0)	13 (48.1)	3 (11.1)	1 (3.7)	27 (100.0)
弱視 全ろう	実数	6 (40.0)	5 (33.3)	1 (6.7)	3 (20.0)	15 (100.0)
全盲 難聴	実数	7 (70.0)	1 (10.0)	1 (10.0)	1 (10.0)	10 (100.0)
弱視 難聴	実数	1 (20.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	5 (100.0)
その他	実数	2 (40.0)	0 (0.0)	2 (40.0)	1 (20.0)	5 (100.0)
計	実数	26 (41.9)	20 (32.3)	8 (12.9)	8 (12.9)	62 (100.0)

() 内は構成比 (%)

21) 年齢別の外出の頻度について（1か月間）

表1-21 年齢別の外出の頻度

		1回以下	2回～3回	4回～5回	6回以上	計
20～39	実数	6 (40.0)	5 (33.3)	1 (6.7)	3 (20.0)	15 (100.0)
40～59	実数	8 (33.3)	10 (41.7)	5 (20.8)	1 (4.2)	24 (100.0)
60～79	実数	10 (45.5)	7 (31.8)	2 (9.1)	3 (13.6)	22 (100.0)
不 明	実数	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	1 (100.0)
計	実数	24 (38.7)	22 (35.5)	8 (12.9)	8 (12.9)	62 (100.0)

() 内は構成比 (%)